



AJEL

日本ラテンアメリカ学会 会 報

1998年4月20日



AJEL

№ 6 5

1. 日本学会事務センターへの事務の一部移行について
2. 理事会報告
3. 研究部会報告
 - 1997年度第1回研究部会
 - 1997年度第2回研究部会
4. 近著紹介
5. 学術・文化情報
 - 日本チリ修好100周年記念セミナー
6. 事務局から

1. 日本学会事務センターへの事務の一部移行について

標記の件につきましては、昨年6月7日開催の学会の総会において、その可否の決定を理事会に御一任戴きました。理事会では、この問題の検討を慎重に進めて参りましたが、3月7日開催の理事会で、契約書を調印することを承認し、理事長として小生が3月11日付で契約書を取り交わしました。この結果、4月1日から別紙「日本ラテンアメリカ学会会員の皆様へ」にございますように、一部の事務が事務センターに移行することになりました。

昨年の総会の席で、一部の会員の方から提起された批判的なご意見を、理事会も重く受け止め、様々な角度から移行に伴うメリットとデメリットを検討して参りましたが、今回移行を最終的に決断致しました。その主な理由は次の諸点にあります。

第一に、学会は現在、多数のバックナンバーを抱え、その管理が大きな問題となっておりますが、今後は事務センターに管理と販売を委託（販売手数料が管理費として充当される）できることとなります。現在小生の研究室にはバックナンバーを容れたダンボール箱が山積みされておりますが、こうした大量の、しかも、増えることが確実な『年報』が、研究室を転々とするといった状態は避けられることとなります。

第二に、会費の徴収作業が円滑化されます。事務センターでは年3回の請求書を発送してくれますので、会費の納入率が高まることが期待されます。

第三に、会員数の増加に伴い、会員からの問い合わせ、会員の異動、入退会の処理などにかかわる事務量が増加し、それらを迅速かつ正確に処理するには一研究室では限界があることです。事務センターに移行することで、より効率的な学会の運営が期待されます。

勿論、学会事務センターに事務の一部を移行することで、学会の組織的問題が解決する

第19回定期大会開催のお知らせ

来る6月6日（土）、7日（日）に神戸大学六甲台キャンパスにおいて定期大会が開催されます。

初日の総会では、昨年の総会で改正された選挙規則にもとづいて理事選挙が行われます。選挙規則改正については、会報№61、62をご参照下さい。

訳ではありませんし、事務費用が割高になることも否めません。ただし、費用の増加を避けるためにも、最初の請求書が届いた時点でお支払い頂けたら、二回目、三回目の請求書の発送費用は不要となります。これは些細なことかもしれませんが、学会事務センターへの移行が学会にとってプラスになるためには、皆様方のご協力が欠かせないことは、この一事からも明らかと存じます。

理事会としては、21世紀に向けた学会組織のより堅実な発展を願って、この決断を行いました。会員の皆様方のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

日本ラテンアメリカ学会理事長 松下 洋

住所変更・異動の御連絡および会費納入に関するお問い合わせは、日本学会事務センターまで、直接、お願いします。
財団法人日本学会事務センター大阪事務所気付
日本ラテンアメリカ学会担当・
大戸道子
〒565-0082 豊中市新千里東町1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル14階
TEL 06-873-2301
FAX 06-873-2300

2. 理事会報告

○第83回理事会報告

日時：1998年3月7日(土)

場所：上智大学

出席者：松下(理事長)、小林、国本、西島、
田中、辻、畑(書記) 委任：幡谷、
細野、中川、中牧 欠席：遅野井

1. 前回議事録を確認した。

〈報告事項〉

2. 日本・チリ修好百周年記念シンポジウム(本学会後援)が2月9日に開催された。また記念事業委員会から刊行物『日本・チリ交流史』の本学会員への寄贈の申し出が

あったので、関連テーマの研究者および希望者全員に配布を要請し、快諾された。

3. 学会事務センター保存用の原簿作成のためのアンケートは、発送数450通中243通が回収された。

〈審議事項〉

4. 長期滞納者に送付した督促状に対して、27名から支払い(予定も含む)の連絡が、6名から退会希望の連絡があった。長期滞納者(督促状未回答者)および住所不明者は、除名処分とすることを決定した。ただし、3月31日を返答期限とする除名通知を送付し、期限までに学会に留まりたい旨の連絡がなければ、最終的に除名する。また、除名処分者が再入会を希望する場合には、推薦者は必要ないが、会費滞納分を完済しなければならぬものとする。

5. 次期定期大会で行われる理事選挙の選挙管理委員会委員長に田中高理事を選出し、委員の人選については、田中委員長に一任した。

6. 学会事務センターに名簿の作成を依頼することを確認した。

7. 新入会員7名、退会希望者9名を承認した。ただし退会希望者のうち、2名からは通常の文書による退会届けによって、1名からは名簿作作用アンケートへの回答として、残る6名からは督促状への回答として、退会の申し出があった。

3. 研究部会報告

1997年度第1回研究部会

○西日本部会

西日本部会は1997年11月29日(土)、久しぶりに国立民族学博物館で例会を開催した。民博は交通の便が悪いうえ、大雨も重なって、出席者は6名という少ない人数であったが、内容的には非常に充実したものであった。山本匡史会員は「虎の踊り」という民俗舞踊劇をとりあげ、先コロンブス期の「闘うジャガー」から現代の「退治されるジャガー」の間

には断絶があると論じ、従来の説とは異なる不連続的側面を強調した。高林則明会員はペルー近代小説の祖とされる二人の女流作家をとりあげ、当時のペルー社会に対する風刺と批判の意味を今日的な視点から再評価するところみをおこなった。以下は報告者自身による要約である。

(中牧弘允 国立民族学博物館)

○第1報告：メソアメリカにおける舞踊劇とその周辺―「虎の踊り」をめぐって―

山本匡史(天理大学)

本発表では、今日のメソアメリカのインディヘナ共同体において上演される民俗舞踊劇のなかでも、先スペイン的要素が濃厚に残存しているとされる「虎の踊り(La danza del tigre)」をとりあげ、インディヘナ自身による伝統文化の再構築の可能性についての検証を試みた。

現在各地で上演されている「虎の踊り」には、明らかに先スペイン期のジャガーのシンボリズムが見いだされ、それを通じて共同体の安寧や豊穡が表明される。しかしながら、これらに通時的な検討を加えてみたところ、先スペイン期および植民地期においてジャガーが登場する儀礼や舞踊には、現代の「虎の踊り」に直接結びつくような事例を見いだすことはできなかった。そこで、闘争を通じた供儀の執行者という先スペイン期からのジャガーの系譜をほうふつとさせる「虎の闘い(La pelea de los tigres)」というもうひとつの伝統行事を手がかりに、征服後のスペインからの舞踊劇の導入の状況をふまえて考察を進め、この「虎の踊り」が先スペイン期のジャガーのシンボリズムと、征服後にスペインからもたらされたであろう舞踊劇という形式をもとに再構築されたのではないかという仮説を提示した。

○第2報告：カベリョ・デ・カルボネーラとマット・デ・トゥルネール―『ブランカ・ソル』と『遺伝』にみる〈モラル〉概念―

高林則明(京都外国語大学)

ともにペルー近代小説の祖とされるカベリョ・デ・カルボネーラとクロリンダ・マット・デ・トゥルネールの二人の女性作家は、多くの点で似通っている。夫がともに医者で、早くに死別した経歴ばかりか、ゴリッティ夫人の主催する文芸サロンに出入りして才能を開花させ、互いに親しい友人同士であった。太平洋戦争敗北前後のペルーで大きな役割を果たしたリカルド・パルマやゴンサレス・プラダといった知識人の感化を受けて才能を開花させるなかで、ロマン主義から写実主義・自然主義への移行を作品を通して映し出すが、19世紀後半のペルー政治や社会を風刺・批判したことから周囲の激しい非難と排斥にあって不幸な晩年を送ることで共通している。本報告では、支配的な実証主義思想と二人の作家の文学観の関わり、それぞれの代表作とも見なされる『ブランカ・ソル』(1888)と『遺伝』(1895)の両作品に認められる〈モラル〉概念についてとりあげた。

1997年度第2回研究部会

○東日本部会

1998年3月28日(土)、上智大学において研究部会を開催し、修士論文の成果が3名より報告された。それぞれ分野は異なるが、ラテンアメリカ研究の広がりや深化を示す内容であり、出席者14名をえて活発な議論が展開された。

久野氏の報告はテキスト批評に基づく手堅い分析が目立った。『落葉』に描かれた悪意の歴史に着目し、この作品には先行研究のいう主題(マコンドの年代記)だけでなく、共同体の暗部という主題も混在していることが明らかにされた。質疑では、よそ者である医師の意味などが問われ、2つのトポスをめぐ

る二重性はマルケスにおける文学とジャーナリズムの二重性につながるのではないか、という指摘もあった。

中島氏による報告は、家族移住が特徴であるブラジル日本移民史に女性の立場、個人の生活史から考察を試みたもので、最後の笠戸丸移民との会見など興味深い内容が示された。個々の事例の位置づけには工夫の余地も感じられたが、女性の立場からの移民史という意義をもっと主張すべきだという意見が出席者から出されたように、男性中心の移民史を再考していくことは移民研究が突きつけられた課題といえよう。

寺田氏による報告は、冷戦後のキューバという世界史的なテーマを政治と経済の両面から分析した報告であった。現地経験の強みを活かしながら、この国が模索する生存戦略の内容（一連の政治経済改革、対米・国際関係の再編など）を詳細かつ構造的に検証し、数名のキューバ研究者を交えて議論も白熱した。キューバ情勢は地域研究が不可欠なテーマであるだけに、会員間の議論が一層深まることが期待される。

各報告の要旨は次のとおりである。

（新木秀和 上野学園大学）

○第1報告：『落葉』（1955）に描かれた
ガルシア＝マルケスの二つの共同体

久野量一（東京外国語大学大学院）

ガルシア＝マルケスの処女作『落葉』は、これまで、彼の代表作『百年の孤独』（1967）の習作という評価が一般的だった。どちらの作品にも、主題としてマコンドの年代記が描かれている点から、このような指摘がされてきた。

本報告では、こうした観点を考慮しながらも、『百年の孤独』以降の作品群も踏まえた上で『落葉』を再読し、テキストに、マルケスの作品に現れるもう一つの主題——共同体の暗部——の萌芽も認められることを明らかにした。

マコンドにやって来たよそ者の医師を巡って悪意が噴出していく経緯をクロノロジカルに見ていくと、閉鎖的な共同体の陰湿さを読み取ることができる。こうした主題は、その後の彼の作品では、「町」を舞台とした作品、『悪い時』や『予告された殺人の記録』へと繋がっていく。すなわち『落葉』は、以降分化していく、二つの主題の双方の出発点となった作品である。

○第2報告：ブラジル日本移民女性一世の
記録—4人の女性の歩んだ軌跡—

中島由紀子（筑波大学大学院）

1908年に開始されてから今年で90年目を迎えるブラジルへの日本移民は、戦前戦後を通じて約25万人にのぼる。その大半は戦前移民で出稼ぎ目的のコーヒー園の契約賃金労働者であったが、後に独立自営農となり集団地を形成し、やがてブラジルに定着した。本論ではそのような歴史の中でかつてとりあげられることの少なかった女性の存在に着目し、4人の女性のライフヒストリーを用いてその軌跡を浮き彫りにしようと試みた。

○第3報告：ポスト冷戦期における
共産主義国家の生存戦略

—キューバの事例から—

寺田純子（上智大学大学院）

冷戦構造を最大限有効に活用することによって全体主義的支配の正当性を確保してきたキューバ・カストロ政権にとって、冷戦の終焉は深刻な危機をもたらしたが、大方の予想に反し、これまでのところキューバはこの危機を管理することに成功している。報告では、冷戦の終焉によって生じた危機に対するキューバの対応を政治・経済の両側面から分析し、ポスト冷戦期キューバの経験が持ち得る意義について考えた。

○西日本部会

3月28日(土)立命館大学にて西日本部会研

研究会が開催され、非会員を含めて8名が参加した。中牧会員の司会により、メキシコの開発戦略に関するものとペルーのフジモリ政権の評価に関する二つの報告が行われた。

田島報告は、博士論文『メキシコ開発戦略転換過程の実証的研究』の一部を報告したもので、「非マキラドーラ」製造業も「マキラドーラ化」（投入財の海外依存）している点に注目して、韓国・台湾などの「複線型成長」（投入財の国内調達）とは異なるメキシコ製造業の特質が別出された。質疑のなかで報告者の理論的立場を巡ってのやりとりがあった。

村上報告では、現地での豊富な見聞にもとづいてフジモリ政権をとりまく問題点や評価が簡潔に報告された。とくに92年4月の憲法停止の評価についてフジモリ側のシナリオとする一般的な見方に対して野党側の動きとあわせて評価すべきとの指摘が印象に残った。マスメディアあるいはインフォーマルなメディアの役割を重視すべきという意見があった。二つの報告をきいて自由主義や権威主義といった経済政策や政治体制に関して、どのようなメルクマールにもとづいて性格規定していくべきかを考えさせられた。以下は各報告の要旨である。

（辻 豊治 京都外国語大学）

○第1報告：メキシコ開発戦略の転換と貿易構造の変化

—製造業部門を中心として—

田島陽一（立命館大学大学院研究生）

本報告の分析対象は、デラマドリ、サリナス両大統領期の貿易政策の特徴と貿易構造の変化である。分析の焦点は、一時輸入制度と称される輸出促進政策で、同制度を利用した製造業部門の輸出と投入財輸入の拡大の両面に注目している。

同期において、メキシコは工業製品輸出を急増させ、輸出指向工業化の道を歩みはじめた。その一方で非マキラドーラ製造業部門の純輸出額・外貨獲得額の伸び率は著しく低下

する傾向にあった。

これは非マキラドーラ製造業部門の輸出拡大によって新たに生み出された投入財需要に、国内からの投入財供給がそれに合った形で増加せず、もっぱら一時輸入制度を通じた輸入拡大によって同部門に投入財が供給されたからである。これは非マキラドーラ製造業部門の輸出の特徴がマキラドーラのそれに近づいたことを意味し、メキシコの輸出指向工業化のパターンが——「複線型成長」路線として象徴的に表現される場合もある韓国・台湾とはまた別の——「マキラドーラ型」輸出指向工業化戦略の道を辿っていることを示している。

○第2報告：フジモリ政権の現状と

今後のペルー政情

村上勇介（国立民族学博物館・

地域研究企画交流センター）

1995年に再選されたフジモリ政権は、5年前の初当選とは正反対の有利な状況で始まった。90年の危機的状況の中で、フジモリは議会で少数与党に甘んじた。95年にはペルーに落ち着きが戻り、与党が議会の多数を占めていた。だが、支持率の低下など2期目のフジモリ政権は決して順調ではない。

この原因には、雇用や貧困対策などミクロ経済面で向上が感じられず、この面での成果を期待していた多くのペルー国民のフジモリへの期待感が低下したことがある。加えて、リマ市長との対立、2000年の大統領選挙への立候補問題、人権侵害など軍による行過ぎ、といった政治的問題が起これ、国民のフジモリへの反発が増した。

次の選挙の行方という問題もあるが、より深刻なのは、フジモリか反フジモリかで政治の分極化が進んでいて、民主的な議論を展開する政治空間すらないことである。これでは過去の不安定なペルー政治の繰返しである。

4. 近著紹介 国本伊代・中川文雄編著『ラテンアメリカ研究
への招待』新評論、1997年、338ページ。

紹介者：三橋利光（東洋英和女学院大学）

本書は、現在のラテンアメリカに関する総合的入門書である。内容はわかりやすく、要を得ており、手堅い。したがって、日本におけるラテンアメリカ研究に関する、現時点での成果を概略したものとしても読める。類書としては、4半世紀前の『＜地域研究講座 現代の世界＞ラテン・アメリカ』（ダイヤモンド社、1971年）を想起する研究者もいよう。しかしそれ以後、一卷に納められた本格的な入門書の試みがないとすれば、本書は、まさに待望の書といえよう。

構成としては、読者をラテンアメリカの全体的な理解へと導くために、建物にたとえれば、3層構造を成していることに注目したい。第1の層は、基層となる序章（中川文雄）である。この地域の全体としての特徴（世界の中での位置、地理的、人種的、さらに共通性と多様性などの）が述べられる。これこそ、ラテンアメリカについての基礎的理解として重要な部分だ。その上で、読者は第2の層に導かれる。そこでは分野別の簡潔な解説が施される〔1：歴史（国本伊代）、2：政治（遅野井茂雄）、3：経済（今井圭子）、4：社会（中川）、5：文化（鈴木慎一郎／野谷文昭／加藤薫）〕。これらの知識を得た後に読者は、第3の層に上る。そこでは各地域別概説が興味深く展開される〔6：メキシコ（国本）、7：中米地域（田中高）、8：カリブ海地域（市柿光浩）、9：アンデス諸国（遅野井）、10：ラプラタ地域（今井）、11：ブラジル（住田育法）〕。こうして読者は、ラテンアメリカの多様性と個性を学び、かなり正確な全体像を把握することであろう。さらに建物の屋根の部分では、ラテンアメリカと日本の関係（12：国本）およびラテンアメリカの学び方（終章：国本）が教えられる。そこではインターネットでの検索の仕方など

の紹介がある。つまり実際の研究の手引きとしての配慮が見られる。

内容としては、執筆者一同が、ラテンアメリカを極力理解しやすくするために、それぞれ個性的に試みた工夫の跡が章毎に滲み出ている。本書を近づきやすく魅力的なものにしているのは、こうした執筆陣の努力であろう。そこに本書の最大の長所が輝いているように思われる。とりわけ従来の日本での研究方法や視座とは異なるスタンスを、意識的に採用したいくつかの論考に、筆者は新鮮な印象を覚えたものである。そのごく一部を紹介すれば、これまでの研究の穴を埋めて全体を捉える試み（3：経済）、人間関係に焦点を当てた平明な解説（4：社会）、なぜの問いかけに答える形式での地域説明（7：中米）、各国の政治的特徴を短文でずばりと指摘した後、詳述へとわたる手法（9：アンデス）など。さらに、その地域に魅力が横溢していることが手に取るようにわかる解説（7：カリブ、11：ブラジル）がある。読者はすぐにも現地に飛んで行きたい気分にも駆られるかもしれない。

もとより本書は、入門書としての性格により、細部にわたる内容については異論はありえよう。しかし本書は、上述の分野別と地域別の研究がほどよく交差して、調和がとれているのではあるまいか。また本書にはラテンアメリカ研究についての、内外の研究機関と現状の紹介もある。読者がこの地域の研究に分け入るための、あるいはこの地域の全体像を結ぶための、有益な道案内になると思われる。つまり初学者にとってもまた専門的ラテンアメリカ研究者にとっても、この地域に関する全体的な基礎知識と理解に至るための、格好の書としての実質を備えているのである。

5. 学術・文化情報

○日本チリ修好100周年記念セミナー

細野昭雄（筑波大学）

日本チリ修好100周年記念セミナー（本学会後援）は、去る2月9日、国際交流基金国際会議場において多数の参加者のもとで実施され、熱心な討議が行われた。第1セッションでは「チリ経済の奇跡の要因と教訓」についてエルナン・ビュッヒと元大蔵大臣から「チリモデルの成功の要因」、経済評論家田中直毅氏から「チリモデル成功の意義と東アジアの経済発展との比較」の二つの発表が行われた。エルナン・ビュッヒ氏は、ピノチェット政権下でいわゆる「シカゴ・ボーイズ」と呼ばれるエコノミストによるネオ・リベラルな経済改革が実施された後、1982年に累積債務危機に直面した後に登場し、現実的なアプローチでチリ経済を回復させ、80年代半ばの新たな経済改革を実施に移し、いわば「チリ経済の奇跡」に大きく貢献した人としてよく知られている。ビュッヒ氏は、このチリの成功については、それは基本的には多くのチリ人の努力の賜であるとしつつ、経済政策とその成果について詳細な説明を行った。

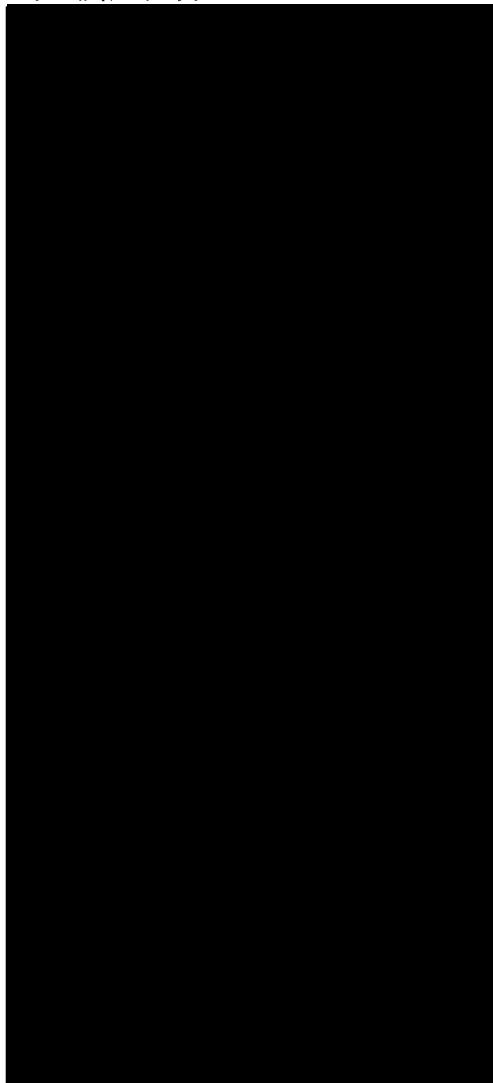
一方、田中直毅氏は、チリの改革の重要性は、政治権力と経済システムとを切り離すことが出来たという点にあることを強調し、東アジアにおいては、日本以外では経済システムと政治権力との関係が強く、これを切り離すことが必要であると指摘した。その上で田中氏は、今後の東アジアの中長期的な経済発展のカギを握る点として、次の二点を挙げた。

その第一は、東アジアが政府の介入を出来るだけ少なくし、市場に経済を出来るだけ委ねる改革をどれだけ実現出来るか、第二は、日本が東アジアからの輸入を十分に吸収できるかという点である。セミナーにおける田中氏の論点を要約すれば、チリ等で行われたような改革を東アジアでこれからどれだけ行えるかという点と、東アジアにおいて日本はアメリカがラテンアメリカで果たしたような役割をどれだけ果たせるかという点の2点にあったということが出来よう。

このセミナーでは、ここに紹介したテーマのほか、第2セッションでは「チリの社会と民主主義」及び第3セッションでは「チリの社会と文化」という興味深いテーマがチリと日本の専門家によって熱心に討議された。第2セッションおよび第3セッションの発表者とその内容は、以下の通りである。カルロス・オミナミ上院議員「民政移管後のチリ政治の特徴と民主主義の進展」、蒲島郁夫氏「発展、平等、民主主義」、ラウル・スリータ氏「チリにおける詩と社会」、増田義郎氏「チリの文化と日本」。

6. 事務局から

1) 会員住所の変更



4) お詫びとお知らせ

- 1月30日付で一部の会員の方々に送付しました会費についてのお知らせの際に、振込先の口座番号に誤りがありました。たいへんご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。
- 4年以上の長期間分の会費をご納入いただいた会員の方で、お手元に届いてない研究年報が必要な方は、必要な号数を事務局までお申し出下さい。

編集後記

新しいことは何もせず、従来の形式・内容を引き継いだけでしたが、2年間無事に会報を発行できて安堵しています。編集に携わって印象に残ったことは、会員による著書の発刊が増えたことです。会報の近著紹介だけではとても紹介しきれなかったことを、残念に思っております。近著紹介の依頼を快くお引き受けくださった方々、学術・文化情報をお寄せいただいた方々、会員の皆様の御協力に感謝しております。また、いつも時間ギリギリの入稿にもかかわらず、予定どおり発行して下さったアトムプレス社の篠崎さん、事務局からの原稿と発送を担当して下さった内村さんにも御礼を申し上げます。本号から学会事務センターからの発送になります。

(辻 豊治・畑 恵子)

No.6 5 1998年4月20日発行
〒657-0013兵庫県神戸市灘区六甲台町2-1
神戸大学国際協力研究科
松下 洋研究室気付
日本ラテンアメリカ学会事務局
TEL/FAX 078-803-0856
郵便振替口座 01140-5-89476